FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！学生生活 Vol. 58

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

中央大学公式Webサイト／学部情報／文学部
chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/

脚本家という仕事

文学部人文社会学科国文学専攻3年
私立中央大学高等学校（東京都）出身
鈴木（すずき） すみれ

皆さんは普段、ドラマや映画を観るでしょうか。私は大学生活のかたわら、脚本家として仕事をしています。最近手がけたものは『厨房のありす』という日テレ系のドラマのHuluスピンオフがあり、そして現在『女神降臨』という映画の公開を控えています。

脚本とは、映画やドラマを作る上での設計図のようなもので、あくまでプロデューサーや役者、現場のスタッフが目を通すものとして存在し、脚本そのものが表に出ることはあまりありません。そのため、どんな俳優が出ているか、どの監督が撮ったかでドラマや映画を観る人はいても、脚本を誰が書いたかで観る人は少ないと思います。

私が脚本家を志したきっかけは、坂元裕二さんという脚本家の作品に出会ったことです。坂元さんの代表作は『東京ラブストーリー』『カルテット』『最高の離婚』『花束みたいな恋をした』など多数あります。小学5年生の時、『mother』というドラマを観て、「こんなにすごいものが世の中にはあるのか」と衝撃を受け、それと同時に「私もこんなものを書いてみたい」と脚本家に強い憧れを抱きました。そして中学2年生の時、フジテレビのヤングシナリオ大賞というシナリオコンクールで大賞をいただいたことから、今の仕事を始めることになりました。

脚本の仕事を始めて最初に驚いたことは、「こんなにも多くの人に会い、対話をしながら進める仕事なんだ」ということです。何かを書く仕事、というと一人で部屋にこもりっきりで、締め切りに追われて……というイメージを抱く方も多いと思いますが、脚本家の仕事は基本的に、プロデューサーや監督の方と皆で何度も打ち合わせを重ねながら進めていきます。テレビドラマは制約が多く、スポンサーとの兼ね合いや俳優さんのスケジュールの都合、ロケ地の位置、予算の関係など考えなければいけないことがたくさんあります。自分の「これを書きたい」という気持ちだけで進められるわけではなく、その場その場の状況に合わせて臨機応変に物語の内容を変えていかなければなりません。

2025年3月20日公開の映画
『女神降臨』ポスター

そのため、時には「いや、そんなことしたら話が成立しなくなってしまう」と思うような物語の改変をしなければいけないこともあります。ですが、最初は「無茶だ」と思いながらストーリーを直していても、不思議なことに、意外にすんなりと新しい物語ができていく時があります。自分の予想を超えて、まるで元々必然だったかのように物語が形を成していく。その瞬間は何よりも面白く、高揚します。

脚本を作る打ち合わせの上で私が心掛けていることは、「説得されにいく」ということです。脚本作りで一番大事なことは、私自身の意見や好みが通ることではなく、「作品がより面白くなること」です。もちろん自分の意思を持つこと、そしてそれを伝えることは大切ですが、プロデューサーや監督など、異なる価値観や視点を持った人の

2024年放送ドラマ
『厨房のありす』のスピンオフ作品

意見を聞いて、「説得されてみる」ことで、物語が思わぬ方向に面白くなったりする。それこそが、誰かとものを作ることの楽しみだなと思います。

また、脚本家という仕事の良いところは、自分の人生のどんな経験でも生かしていけるということです。たとえば今月公開の映画『女神降臨』の後編では、主人公が大学生ということで、大学での生活の描写が求められます。自分自身が大学生のため、そういったシーンは細かいディテールやあるあるも織り交ぜてリアルに描けたのではないかなと思います。

しかし、物語の中には、書き手である自分と近い性格や環境を生きるキャラクターだけでなく、私とは正反対の価値観を持っている人や、私がまったく知らない専門的な仕事に就いている人が登場することも多々あります。そして、それらすべての人を生き生きと、説得力を持って描かなければならない。そういう時は、自分の人生で巻き起こったことや、友達から聞いた話、家族との会話などのすべてが脚本作りの大事な材料になります。また、専門家の意見をお聞きしたり、取材をしたりすることで、今までまったく知らなかった新しい世界に触れることができるのも、脚本を作っていて本当に楽しい瞬間です。取材で聞くことができる話は、大抵こちらが想像していたものとはまったく違い、「事実は小説より奇なり」とはこのことだなといつも思わされます。取材を経て、物語の方向性をガラッと変えたりすることも少なくありません。

ここまでの話でおわかりのように、脚本の仕事は、決して一人ではできません。一緒に脚本を作るプロデューサーや監督、取材などの形で協力してくださる方々、キャストの方々、現場のスタッフの方々などたくさんの人々とかかわって一つの作品を作っていきます。

もちろん、他者とかかわって何かを作っていく過程では、自分の思い通りにならないことも多く、壁にぶつかることも多々あります。ですが私は、その「思い通りにならなさ」を楽しむことこそが、とても大事なのではないかと思います。最初に自分一人で考えていた物語が、誰かの意見を聞いたり取材をすることで、どんどん形が変わったり、脇道に逸れていったり、膨らんでいったりして、最終的にはテーマすら変わっていたりする。そんなふうに、自分の書いている物語が、自分の想像を超えて面白くなっていくことは、とても幸せな体験であり、これから先何度でも味わいたいと思えることです。

大学へ通うことと脚本を書くことの両立が大変な時もありますが、私は常に「今やりたいこと」「今できること」は何かということを考え、動くように心掛けています。大学生として4年間実りのある学びをしつつ、できるだけ長く脚本家という仕事を続けていけるよう、目の前のことを一つ一つ誠実に取り組んでいきたいと思います。

中学生時代、フジテレビヤングシナリオ大賞の現場見学にて

文学部だより

相談行為が価値を持つように

岩谷 美佳（いわや みか） 文学部事務室

文学部事務室でキャンパスソーシャルワーカー（以下、CSW）として勤務しております、岩谷美佳と申します。CSW は主に、学修に困難を抱える学生の方の支援を行っています。一口に学修の困難と言っても、その理由はさまざまです。たとえば、なかなかレポートが書けない背景に、完璧にやろうと考え過ぎてしまう傾向があったり、試験とのスケジュール管理が苦手だったり、個々の学生により状況は異なります。自分に自信が持てず授業中の指名やグループワークがストレスになったり、卒論の取り組みに不安を強く感じたり、情報の取捨選択に戸惑い指導教員になかなか相談できない事態に陥ったりすることもあります。一方で、一人暮らしやアルバイトを初めて経験し、自分の生活と学修のペースがうまく掴めないといった学修環境にまつわる困難もあります。

当初、多くの学生は「授業の欠席が続いている」「単位が取得できない」との主訴で来談します。CSW が学生の抱える状況を具体的に聞き取り、学生のペースに合わせて困り事の背景を明確にしていき、対応を協働して考えていきます。自分の状況を相手に伝える行為を通して学生が自分自身で悩み事を整理し、なるべく主体的に考えるよう促しています。その時々で、CSW は専攻の先生方や事務室の職員、学生相談室の担当者とも連携し、学生を「面」で支えるよう対応していきます。

自分がどうありたいか、20 歳前後は時に不安定になりやすく、SNS など情報があふれている中で不安を強く感じることがあるかもしれません。相談する行為が人と信頼関係を結ぶ体験となり、大学を卒業してからも価値を持つよう支援していきたいと考えています。

何かありましたら、お気軽に文学部事務室にお問い合わせください。